

(公財)ポークラ伝統文化振興財団  
平成25年度 第33回『伝統文化ポークラ賞』を決定  
～工芸・芸能の分野8件が受賞～

公益財団法人ポークラ伝統文化振興財団(理事長 佐野文比古)は、顕彰事業の一環である第33回『伝統文化ポークラ賞』の各受賞者を決定しました。今年は大賞1件、優秀賞1件、奨励賞1件、地域賞5件合計8件を表彰します。ポークラ・オルビスグループは、「財団法人ポークラ伝統文化振興財団」を昭和54年12月に設立し、文化を通して人間の本質を貫く感性を継承する活動の支援を続けています。『伝統文化ポークラ賞』は、伝統工芸技術や伝統芸能、あるいは民俗芸能・行事など無形の伝統文化の分野で貢献され、今後も活躍が期待できる個人・団体に対して贈呈し、更なる活躍と業績の向上を奨励して表彰するものです。昭和56年の第1回から今年で延べ276名の方が受賞されることとなります。なお、賞贈呈式は、10月24日(木)、ANAインターコンチネンタルホテル東京にて執り行う予定です。

## 【受賞者一覧】

賞	受賞内容	受賞者・代表	賞	受賞内容	受賞者・代表
大賞	東京都 能楽の伝承・振興  観世 清和(54歳)		地域賞 (北陸・甲信越・東海ブロック)	愛知県 鳳来寺硯の制作・伝承  名倉 鳳山 (59歳)	
優秀賞	山口県 萩焼の制作・伝承  岡田 裕(67歳)		地域賞 (近畿ブロック)	兵庫県 義太夫節三味線の伝承  鶴澤 友勇(46歳)	
奨励賞	京都府 鑄込みガラスの制作・伝承  石田 知史(41歳)		地域賞 (中国・四国ブロック)	広島県 音戸の舟唄の伝承・振興  音戸の舟唄保存会	
地域賞 (北海道・東北ブロック)	福島県 民俗文化財の保存・振興  懸田 弘訓(76歳)		地域賞 (九州・沖縄ブロック)	大分県 北原人形芝居の保存・伝承  北原人形芝居保存会	

## ◇「伝統文化ポーラ賞」表彰の趣旨

わが国の貴重な伝統文化に貢献され、今後も活躍が期待できる個人または団体に対し、更なる活躍と業績の向上を奨励することを目的とします。具体的には伝統工芸技術や伝統芸能、あるいは民俗芸能・行事など無形の伝統文化の

1、保存・伝承のために欠くことのできない基礎的な仕事

2、「技」または「芸」または「行事」等の保存・伝承

3、保存・振興のための研究や普及活動

を対象とし、これを顕彰するものです。

## ◇表彰内容

1)大賞 賞牌・賞状・副賞(150万円)

優秀賞の中で特に抜きん出た業績をもつ個人または団体。

2)優秀賞 賞牌・賞状・副賞(100万円)

永年地道に努力・精進され、優れた業績を残し、今後も一層の業績を上げることが期待できる個人または団体。

3)奨励賞 賞牌・賞状・副賞(50万円)

将来に向けて、大きな業績を挙げ貢献することが期待できる比較的若い個人または団体。

4)地域賞 賞牌・賞状・副賞(50万円)

地域において、これまでに優れた業績を残し、今後も一層の業績を上げることが期待できる個人または団体。

(全国を「北海道・東北」、「関東」、「北陸・甲信越・東海」、「近畿」、「中国・四国」、「九州・沖縄」の6ブロックに分けて選考。)

### 【メディア関係者さまのお問い合わせ先】

株式会社 ポーラ・オルビスホールディングス 広報・IR室 菊池・伊藤(司)

〒104-0061 東京都中央区銀座 1-7-7 ポーラ銀座ビル TEL 03-3563-5540 / FAX 03-3563-5543

【お客さまのお問い合わせ先】公益財団法人 ポーラ伝統文化振興財団 TEL 03-5795-1279 / FAX 03-3280-2830

## 【受賞者紹介】

### ◇大賞

#### 観世 清和 能楽の伝承・振興 東京都

観世清和さんは、父、二十五世観世宗家、観世左近元正氏に師事し、昭和39年4歳のとき「鞍馬天狗」花見で初舞台を踏んだ。平成2年観世流家元を継承(二十六世観世宗家)し、翌3年財団法人観世文庫を設立、理事長に就任した。

舞台活動としては、観世会定期能をはじめ、「三輪・誓納」、「江口・平調返」、「定家・袖神楽・露之紐解・甲之掛」など大曲、秘曲を勤め、国内外で幅広く公演・普及活動に取り組んでいる。平成23年5、7月には東日本大震災義援能3公演を開催し、その後も義援活動を継続している。また、同年7月には観世宗家としては実に二百年振りとなる最奥の秘曲「関寺小町」を演じ、五老女すべてを勤めあげた。

観世宗家に伝わる能面・能装束や、貴重な文書の保存・活用と、国内外への能の普及を目的として財団法人観世文庫を創設したのも大きな功績であり、その学術的研究成果の舞台への回帰という形で自身の芸を著しく高めている。財団設立後全国9都市で「幽玄の華」展をいち早く開催し、世阿弥自筆本など貴重な収蔵品を公開した。上演が途絶えていた世阿弥の能「箱崎」、「丹後物狂」の復元もその学術精査を背景とするもので、国立能楽堂における世阿弥自筆本による「阿古屋松」等の復曲上演も後世に残る大きな仕事である。

受賞歴としては、平成7年度芸術選奨文部大臣新人賞、平成9年フランス芸術文化勲章シュヴァリエ章、平成24年度芸術選奨文部科学大臣賞などを受賞した。

今年は観世宗家生誕六百八十年、世阿弥生誕六百五十年記念としての「観世宗家展」が開催され、監修／総合プロデュースを担当した。

名実共に能を代表する第一人者であり、宗家という重責を背負い、未来に向かって着実に歴史を刻んでいる。



『江口 平調返』

一子相伝の小書「平調返」。「三輪誓納」とともに観世宗家に大切に相伝されている。

25 世観世左近 23 回忌追善能 (H24.4)

### ◇優秀賞

#### 岡田 裕 萩焼の制作・伝承 山口県

岡田裕さんは、大学卒業後父である萩焼の名門晴雲山岡田窯7代岡田仙舟氏に師事、たゆまぬ研鑽によって体得した萩焼の伝統技法を守り、萩独特の工味と釉薬を生かしながらも、自身の感性を生かし、現代感覚のあふれる個性的な作風を確立し、いまやわが国を代表する陶芸家の一人として目覚ましい活躍をしている。

ここ10年余りは自ら「炎彩」と名付けた意匠表現において、萩焼の固有素材の美質を生かした内面描写的な制作に励み、完成度の高い新たな美感を萩焼400年の伝統に加えつつある。「炎彩」は大道土や見島土といった萩の伝統的な素地土の泥漿と白釉などの釉薬を、エアブラシを用いて施す装飾技法で、この装飾技法によって粗密度ある肌模様が全面的に展開され、あたかも窯中に激しく揺らめく炎を見るような動感を現出せしめている。

活動歴としては、昭和48年山口県美術展入選(発表活動の開始)、昭和54年日本陶芸展入選(以後毎回入選)、日本伝統工芸展入選し、昭和60年日本工芸会正会員となった。

そして、平成18年には山口県指定無形文化財萩焼保持者に認定された。

また、作陶以外にも長年萩女子短期大学の陶芸科で教鞭をとると共に、日本工芸会山口支部幹事長等の役職を勤め、萩市や山口県内の文化催事でのワークショップや講演を行い、後進の指導、萩焼や陶芸文化等について幅広い普及活動を行っている。

今まさに陶芸に対する情熱はますます高まり、特に最近の進境は著しいものがあり、将来の活路に大きな期待が寄せられている。



平成24年  
職場でろくろを廻して作品を制作  
している場面

## ◇奨励賞

### 石田 知史 鑄込みガラスの制作・伝承 京都府

石田知史さんは、ガラス工芸の中の「鑄込みガラス」の技法(一般にはパート・ド・ヴェールという名称で呼ばれている)を駆使して、現代という時代を意識した作品を生み出しているガラス作家である。

技法的には、イメージした原型を作り、それを耐火石膏で型取りする。次にその型に繊細な文様を施し、焼成後の色彩をイメージしながら、その文様やそれを覆うように色ガラスの粉をつめて窯で焼成する。冷却後に耐火石膏の型を壊して作品を取り出し、仕上げの手順を経て完成となる。その特徴は型を用い、粉状のガラスを窯の中で焼成することであり、繊細な文様表現ができるとともに、より複雑な色彩を生み出すことができる。

もともとこの技術・技法は、父であり師でもある石田亘氏が手掛けてきたものであるが、石田さんはあえて東京ガラス工芸研究所のパート・ド・ヴェール専科であらためて学んでいる。

この技術・技法で生み出される作品は、透光性がありつつ、その光を内包するような独特な光の屈折が見られるが、石田さんの作品には、この独特の素材感やそれから生まれる色彩表現を、自身が思い描く形と文様に融合させて生み出されている。

平成10年日本伝統工芸展初入選以来、平成18年京都府文化賞奨励賞、同年日本伝統工芸展「日本工芸会総裁賞」等数多くの賞を受賞している。

近年では、茶の湯の造形にも積極的にチャレンジしており、目的をもってこの技術・技法を用いて作品を生み出そうとしている。今後ますますの活躍が期待されている。



平成25年7月撮影  
耐火石膏の外型に線刻を施した箇所、色ガラスの粉を水で溶いたものを、筆で詰めている所。

## ◇地域賞

### 《北海道・東北ブロック》 懸田 弘訓 民俗文化財の保存・振興 福島県

懸田弘訓さんは、福島県立高校の教諭時代から文化財や地域の祭礼、民俗芸能等の研究を行い、福島県教育委員会で文化財保護を担当、福島県立博物館学芸課長、県立川口高等学校校長などを歴任した。

具体的には、各地に伝わる祭礼や民俗芸能、わらべ歌、民謡などの伝統文化に関する調査・研究を行い、福島県に伝わる伝統行事や民俗芸能等は、実地に調査し、そのいわれや歴史、歌や踊りの特徴を詳細に研究している。

研究の成果は、独自の著書のほか、市町村史、研究誌、歴史に関する雑誌や機関誌等への寄稿、経済情報誌への民俗芸能の連載、ラジオ番組のパーソナリティーとして番組を持つなど、様々な方法で発表している福島県民俗芸能研究の第一人者である。

また、蓄積された研究の成果から、様々な悩みを抱える県内の民俗芸能の保存団体に対しても的確な助言・指導を行っており、関係者からの信頼は極めて厚い。

特に、東日本大震災後は、民俗芸能学会福島調査団長として被災地に赴き民俗芸能団体の代表者に直接面談し、被災状況や団体の置かれている状況、要望等を取りまとめ、国・県の補助金や、民間支援団体の助成をうけられるよう支援するなど、伝統文化の保護のため献身的に取り組んでいる。

福島県では、未だに15万人以上の方々が故郷を離れ、避難している状況にあり、故郷と人々を結ぶ民俗芸能は、無くてはならない地域の宝である。その福島県の民俗芸能の保存・継承・発展に果たしてきた功績は極めて大きい。



国立劇場 平成25年6月8日  
「東日本震災復興支援 東北の芸能III 福島」での解説(リハーサル)

## 《北陸・甲信越・東海ブロック》名倉 鳳山 鳳来寺硯の制作・伝承 愛知県

名倉鳳山さんは、昭和52年大学卒業後、鳳来寺硯制作の家業伝承に入り、父の四代名倉鳳山（正康）氏の指導のもとで技法を修学し、伝統を受け継ぎつつ硯を「墨の道具」にとどめず、日本人の美意識が造る「心の器」を目指し、独創的造形力の研鑽に努めてきた。

鳳山さんの作る硯には機能美とも美術品の美とも異なる独特の美しさが宿っており、先人から受け継いだ手仕事の技と、自ら磨き抜いた芸術的手法を融合させた新しい硯は、工芸という分野の奥深さを教えている。

平成15年50歳を節目に父の名を継ぎ鳳山を襲名。鳳来寺周辺から産出する金鳳石、鳳鳴石、煙蔵石という三種の石を活かした特産の硯作りを現代に伝える数少ない継承者である。硯工芸にあって千年の永い伝統があると言われる鳳来寺硯を題材に、機能の中に新鮮な形態の中にも大学で学んだ確かな造形力で硯工芸の新分野展開に多大な実績を挙げ、「硯」を芸術工芸の世界に引き上げることに貢献するなど、その作品、業績は高い評価を得ている。

昭和56年日本伝統工芸展入選以来数多くの賞を受賞し、平成15年には愛知県芸術文化選奨文化賞受賞、平成22年には新城市無形文化財保持者に指定された。

教育委員会、日本工芸会の役員を歴任し、平成21年から名古屋造形大学で後進の指導・育成に尽力すると共に、現在大学で助手として石彫りに打ち込んでいる子息への技術の継承に取り組んでいる。



平成25年7月16日自宅工房にて、ノミで硯を削る作業をしている所。

## 《近畿ブロック》鶴澤 友勇 義太夫節三味線の伝承 兵庫県

鶴澤友勇さんは、小学校一年生より鶴澤友路氏（平成10年重要無形文化財「義太夫三味線」認定）に師事、昭和60年財団法人淡路人形協会に入社し。淡路人形座の一員として国内はもとより世界各国の公演に参加して、日本の伝統文化を広く知らしめてきた。

鶴澤さんは持って生まれた芸才というか、すぐれた音色を奏で、三味線はもとより、太夫としても美声この上なくすぐれている。

何事にも意欲的でプロとしての各自向上を図るため、平成12年より毎年「素浄瑠璃勉強会」を主宰し、淡路人形座にしか残っていない演目の復活に取り組んでおり、地域の人々に鑑賞していただき、古き良き文化の向上に努めている。

全国各地で公演する一方、各地の小中学生を対象に「義太夫三味線」のワークショップを行い、日本文化の良さを広める努力をしている。

また、地元の中学校郷土部で、太夫、三味線の指導を時間を惜しまず毎週指導している。

平成2年より毎年財団法人人形浄瑠璃因協会主催「女義太夫公演」に出演し、平成10年には、同協会奨励賞を受賞している。

芸才にたけた人であり、鶴澤友路氏後継者にふさわしい人物である。



平成25年2月26日  
国立劇場演芸場  
第32回伝承者研修発表会  
女流義太夫演奏会  
伽羅先代萩「御殿の段」で  
出演

## 《中国・四国ブロック》 音戸の舟唄保存会 音戸の舟唄の伝承・振興 広島県

民謡「音戸の舟唄」は、広島県南西部の瀬戸内海沿岸、特に呉市音戸町を中心に瀬戸内海を往来する小舟の櫓を押しながら歌った「櫓漕ぎ唄」で、江戸時代にはすでに歌われていたようであるが、時代を経るにつれ機械化などで歌われることが少なくなった。

昭和30年代音戸町出身の高山訓昌氏によって節回しがまとめられ、歌詞の作詞、追加や娯楽性にも工夫が加えられ、今日の「音戸の舟唄」となった。改良された舟唄は広く愛されるようになり、広島県を代表する民謡として小中高等学校の教科書にも採り上げられるようになった。この唄を伝承しようとした高山氏は昭和39年「音戸の舟唄保存会」を設立、初代会長として自宅や公民館、小学校でも後進の指導に努めた。平成13年高山氏の死後、その遺志を継いで平成15年に約60人で「音戸の舟唄保存会」を再結成した、

歌い方の特徴は尺八など伴奏のつかない「素唄」いわゆるアカペラである。シンプルに合いの手と櫓ぐいのきしむ擬音、歌声だけで聞かせる。

平成15年の再結成以来、会長と3人の副会長が講師となって三つの教室を主宰し、月2回町内外の生徒を指導し、世代を超えた交流とともに伝統芸能の継承に努めている。また、小中学校でも指導しており、県民文化祭で3回の最優秀賞に輝き、国民文化祭には4回参加している。

平成17年音戸町は呉市と合併し「音戸の舟唄」は呉市の無形文化財に指定され、平成20年「第1回音戸の舟唄全国大会」が開催され、第2回大会からは小中学生対象のジュニアの部も設けられ毎年開催、今年1月第6回を迎えた。

保存会の地道な取り組みで後継者も順調に育っており、地域民俗芸能のますますの発展を期待致したい。



平成24年9月29日呉市記念式典（市制施行110周年）に於いて、音戸の舟唄保存会の三人の副会長（公民館教室の指導者）が舟唄を素唄で熱唱披露した。

## 《九州・沖縄ブロック》 北原人形芝居保存会 北原人形芝居の保存・伝承 大分県

北原人形芝居は、毎年2月の第1日曜日に、地元の原田神社の祭礼「<sup>まんねんがん</sup>万年願」で奉納している民俗芸能で、現在大分県では中津市の北原にだけ残されている人形芝居で、昭和32年県指定無形民俗文化財に指定された。

しかしながら衰退に歯止めがかからず、昭和の終わりから平成の初め頃には消滅寸前にまで追い込まれたため、北原人形芝居を何とか残そうと、平成2年保存会が結成された。翌年の平成3年から地元で人形操り・浄瑠璃そして義太夫三味線の練習を始め、その結果、平成9年以降たびたび国民文化祭に出演するまでになった。

北原の人形芝居の操法は、基本的に文楽と同じ三人遣だが、全国的にみても珍しい「はさみ遣い」という一人操法がある。この技法は一時途絶えていたが、フィルムを唯一の手掛かりとして、“はさみ遣い”の復元に取り組み、現在は「はさみ遣い」も演じられている。

保存会は新しい会員も増え、現在では29名の会員が毎週1回練習を行い、人形操り、語り（義太夫）、義太夫三味線の技の習得に努めている。また、大分県下に唯一の人形芝居のクラブがある地元の中津市立三保小学校に保存会の会員が出向き、人形劇クラブを指導している。近頃はこの人形クラブ出身者が保存会に入会するまでになってきた。

北原人形芝居保存会は、このように新しく会員になる若い人の加入もあり、今後更なる発展が期待される。



平成24年11月15日撮影  
伝統芸能の更なる発展の為に各地で、人形の説明をする、澤村会長。